

メイキング・オブ・ア・サージョン

副島 雄二

令和元年5月1日付けで信州大学医学部外科学教室 消化器・移植・小児外科学分野（旧外科学第一教室）の教授を拝命いたしました。一つの教室の未来を預かるという大きな責任と与えられたチャンスを一外科医としてどのように実りある物にしていくか、日々自分自身と向き合い、格闘する毎日です。

当科の医局員を含め、ほとんどの方が私の素顔をご存じないと思いますので、少し私自身の肝胆膵・移植外科医としてのキャリアを例にとりながら、一外科医ができてあがるまでの経過について、エッセイ風に紹介させていただきます。

私は、もともと鹿児島県の大隅半島、串良町というところの出身で県立鹿屋高校を卒業後、九州大学医学部に入学いたしました。学生時代は、登山やスキー、世界の辺境地を旅すること、英語の勉強、昔の映画（凝り性です）に熱中し、正直あまり勉強が得意な学生ではなかったように思います。いつから外科医を志したかははっきり覚えていませんが、大学2年の時、ブラジルで出会った外国人女性に将来何科にすすむのか？と聞かれて“I want to be a surgeon”と答えたこと、“あなたは指がきれいだから、きっといい外科医になるわ”と言われてまんざらでもなかったことを今でもはっきり覚えていますのでその頃には、すでに心は決まっていたのだと思います。

平成3年に九州大学を卒業し、当時杉町圭蔵先生が主宰しておられた九州大学第二外科に入局いたしました。何の迷いもありませんでした。研修医の頃は何もわかっていなかったと思いますが、ぼんやりと自分の理想像として、最難関手術のできる外科医、国際的に活躍できる外科医を思い描いておりましたので、当時我が国でまだ全く臨床がなかったものの、最も難しそうな肝移植、特にアメリカでの臨床に対する憧れがどんどん強くなっていきました。当時の日本は、まさに肝移植黎明期で島根医科大学での1例目（1989年）、京都大学（1990年）、信州大学（1990年）と続き、我が国における移植前夜のとてもエキサイティングな時代だったと思います。身近な九州大学の先輩が次々とアメリカへ留学し、その苦労話や手術のレベルの高さを見聞するにつけ、絶対に自分もそうするのだと決心していました。

1998年から2年3か月、念願かなって当時肝移植症例数全米2位で年間200例もの症例があったニューヨークのマウントサイナイメディカルセンターに臨床留学する機会を得、本場アメリカの移植臨床にこれでもかというくらいどっぷりとつかうことができました。当時アメリカではすでに（脳死）肝移植は日常診療であり、脳死ドナー管理・分配システム、移植手技等、全てが効率良く定型化されていました。成人生体肝移植に関しては、ちょうど私の留学中に臨床が始まり、あっという間に全米一の施設になりました。移植外科医は、週替わりでドナー・レシピエント・病棟の担当をローテートしますが、ドナー担当の場合、休日など関係なくほぼ毎日、大抵は夜中に移植コーディネーターからポケットベルの音で起こされ、自分で学生や新人フェローを電話で確保し、ERに集合して救急車やプライベートジェット機でドナー病院に向かい、臓器を摘出し、帰ったらバックテーブルで臓器をクリーンアップし、レシピエント担当者に摘出臓器の状況を伝えて、そこで役目は終了、帰宅して寝るという毎日の繰り返しでした。レシピエント担当の場合、大抵は10時間に及ぶ手術になり心身ともくたくたになりますが、術後ICUに入れば、あとは

ICUの医師が診てくれるため手術のことに専念すればOKでした。このようにアメリカでは病院で働いている人の数が圧倒的に多く、外科医、内科医、コーディネーター、パーフェュージオニスト（臓器保存液や水、手術器具、臓器運搬を担当する人）、ナース、PA（フィジシャンズ・アシスタント）おのおの役割分担もはっきりしているため、外科医は手術に専念することができていました。我が国での非効率性やドナー担当医師や外科医に対する過大な負担は、20年前とほとんど変わらないところをみるにつけ、医療システムと効率に対する考え方の彼我の差を痛感します。留学中は、術者であれ、助手であれ、自分の関わった全ての手術の記録と自分自身のコメントをノートに書き留め、手術のないときは図書館に行って大量の論文をコピーし、ノートにまとめ、文字通り臨床に没頭した2年間でした。体力的にいくらきつなくても自分自身の成長が実感できるため、またオン・オフがはっきりしているため心はいつも元気でした。振り返ってみるに現在の私の手術手技のほとんどは、この時期に上級医から教えられたものです。

留学から帰国後の2001年に私自身初めて生体肝移植レシピエントの術者を任されました。その患者さんも移植後18年がたち、今や3児の母となっています。私が信州大学に赴任する直前に、3人の子供とドナーであるお母さんを連れてわざわざ私を訪ねてくれ、笑顔で感謝の気持ちを伝えられ、あらためて移植医療のすばらしさを実感した次第です。

以来、2002年から17年間、生体肝移植を中心に腹腔鏡下手術を含めた肝胆膵外科の臨床・研究・教育に携わらせていただきました。特に肝移植に関しては、これまでの九州大学全症例の約半数、400例にのぼる執刀を任せていただき、自分のスタイルで九州大学の肝移植プログラムをつくり上げていったことは、私の何よりも大切な財産となっています。九州大学第二外科での28年間は、厳しくも優しく、教育熱心な先輩、同僚、後輩に恵まれ、何度も味わった挫折感も含めてとても充実した28年間だったと思います。九州大学で私が学んだことは、“責任感”と“先輩・後輩、人のつながりの大切さ”であったように思います。

さて、信州大学外科学第一教室は、初代の星子直行先生から林 一郎先生、幕内雅敏先生、川崎誠治先生、宮川眞一先生と世界を代表する外科教授が連綿と歴史を積み上げてきた我が国でも伝統ある教室であると認識しております。特に幕内雅敏先生が1990年に開始され、川崎誠治先生、宮川眞一先生と受け継がれた肝移植の臨床は、現在324例を数え、信州大学の燦然と輝く宝であると認識しています。このような伝統を引き継ぐことは、私の当然の責務であり、そのような職を与えていただいたことは身の引き締まる思いです。おこがましい言い方になると思いますが、外科医という職業は、外科手術によって病の淵から患者を救い、患者さんとその御家族の笑顔と幸せ、感謝を日々もらうことができるという二つとない素晴らしい職業だと認識しています。患者さんに必要とされ患者さんから感謝されるという精神的な満足感と達成感、自分だけの物質的な満足感にはるかに勝るかけがえのない感情であり、これこそが我々外科医の日々の努力と仕事の原動力であり、本質であると信じています。私は、この価値観を根気強く教室員や学生諸君に伝え、外科医の素晴らしさを伝えて行きたいと思っております。

当たり前だとは思いますが、何よりも我々の仕事は、全てのことが患者第一でなければなりません。そのためには、一人一人が自分の仕事のクオリティに責任とプライドを持って取り組み、チームの力を結集して、安全で最新最高の医療を届け、患者さん・御家族が笑顔で帰れるように全力を尽くして行きたいと思っております。

信州大学の皆様方には、我々をあたたく見守っていただき、我々の行動が、この“決意表明”に少しでもずれたところがあれば、遠慮なく御指導賜れば幸いに存じます。2019年10月1日をもって名前も新たになった外科学教室 消化器・移植・小児外科学分野を今後ともどうかよろしくお願いたします。

(信州大学医学部外科学教室 消化器・移植・小児外科学分野)